

会 議 録

会 議 名	令和元年度第2回野田市生物多様性のだ戦略市民会議
議題及び議題毎の 公開又は非公開の別	(1) 第2期生物多様性のだ戦略策定の進め方について (公開) (2) 自然環境調査の計画 (案) について (公開) (3) 社会環境調査の計画 (案) について (公開)
日 時	令和2年2月26日 (水) 午後3時30分から午後6時まで
場 所	市役所低層棟4階委員会室
出席委員氏名	会 長 長谷川 雅美 副会長 茂木 康男 委 員 朽津 和幸、田中 利勝、新保 國弘、田中 勝美、 土屋 守、黒川 茂、染谷 幸夫、金丸 治子 鈴木 哲雄、古矢 浩祥、石山 由美子、柳澤 朝江 岡田 壽
事 務 局	今村 繁 (副市長) 佐藤 眞平(建設局長) 山下 敏也 (自然経済推進部長) 宇田川 克己 (自然経済推進部次長兼商工観光課長) 中村 正則 (みどりと水のまちづくり課長) 勝田 等(みどりと水のまちづくり課長補佐) 茂木 大介 (みどりと水のまちづくり課自然保護係長) 遠山 千夏 (みどりと水のまちづくり課自然保護係主査) 久保木 史子 (みどりと水のまちづくり課自然保護係主任主事) 尾原 諒 (みどりと水のまちづくり課自然保護係主事補)
欠席委員氏名	委 員 柄澤 保彦、香西 陽一郎
傍 聴 者	無し
議 事	令和元年度第2回野田市生物多様性のだ戦略市民会議の会議結果 (概要) は次のとおりである。

1 開会

《事務局：中村課長》

委員総数17名のうち14名が出席し、半数以上が出席しているため、条例の規定により会議が成立する旨を報告（1名遅参し、最終的には15名出席）。

今回の会議は希少種などのデータを取り扱わないため傍聴が可能であること、また現時点で傍聴希望者はいないが、会議中に傍聴希望者が現れた場合はこれを許可する旨を説明。

初参加となる委員の紹介と挨拶。

今後、市と委員、日本生態系協会の協力のもと、生物多様性のだ戦略を作っていく旨を説明。

2 会長挨拶

《会長》

野田市の生物多様性の策定に当たっては、前回の会議を参考としつつ、市民と委員の意見を酌み、地域の大事な自然環境を守り、将来に活かしていくための意見を取りまとめていきたい。

現在、コウノトリの放鳥等の活動により、関東一円の自治体に野田市の取組が浸透しており、高い評価を受けている。野田市にお住まいの方が、身近な自然環境を守りたいと思うような戦略を作る必要があると思う。

私はかつて他市で自然環境調査員養成講座を行う中で、参加者の自然に対する生の声を聞く機会があった。そういった市民の声と専門家による調査を通じて、市民の目線に合った野田市の生物多様性戦略を提案していきたいと思う。

3 諮問

鈴木市長が諮問書を読み上げた後、会長に諮問書を渡した。

4 議題

(1) 第2期生物多様性のだ戦略策定の進め方について

《事務局：茂木係長》

資料説明（資料1）

《委員》

大筋においては賛成。本日欠席の委員からの伝言が幾つかあるので伝えたい。

まず、5年前の基礎調査データは市に提出した後、どのように流れて報告が上がったのかも一度検証したい。前回の上鹿野地区のデータが反映されていないのではないかと。

また基礎調査は、進捗状況を季節ごとに上げ、問題点について打合せをしてはどうか。

《事務局：宇田川次長》

前回の調査は、国の主体事業の一環として実施する中で、国の調査方法に準じて行った。今回は委員の皆様のご意見を踏まえ、調査方法についても検討した上で実施したい。

前回の上鹿野地区のデータについては、市の方で保管している。公表すべきかどうかは、調査員の方と意見を交えた上で決定したい。希少種データが含まれているものは全てを公表するのではなく、指標種だけを公表するなど部分的な公開も行っている。そういった点もふまえ、今後の作成にご意見を頂ければと思う。

《会長》

3、40年前は、自然環境の調査は専門家が行い、報告書をまとめて、どんな生きものがあるかを調べるだけで終わっていた。この調査結果が地域社会や住民に還元されていなかったという反省を踏まえ、地域で生息する生物を保存しつつ、地域で暮らしていく基盤を残していくための方向性やルール作りをしていくという機運が高まってきている。

(2) 自然環境調査の計画(案)について

《事務局：茂木係長》

資料説明(資料2)

《会長》

生物多様性の戦略を考えるに当たり、重要となるものは生物の生息状況等に関する正確な基礎資料だと思う。環境行政の方からの提案がベースにあるが、皆さまの意見を頂きながら、調査方針を検討していきたい。

《委員》

5年前の戦略策定の際の調査スタッフは高齢化で今回の調査は厳しいかもしれない。前回、

調査協力した団体以外にも調査依頼できるかどうか、市から相談してほしい。

また今後、調査を依頼すると思うが、調査員会と市民関係者の組織図を作ってはどうか。

中間報告も受けていただけるとのことで、それは了解したい。

調査スタッフの打合せについても、先ほど示されたことに賛成する。

《会長》

私からも野田にお住まいの方々が調査に参加すること、そしてこれまで活動されてきた自然保護関係の団体への声かけをお願いしたい。

調査スタッフの高齢化に伴う、若い労働力の確保手段として、大学の学生などにも参加を呼び掛けたいと思う。今回の調査を通じて、地元根差した団体と学生の交流が常に行われるようになれば良いと思う。

《委員》

今回の調査の場所に関して「大殿井」には小さな谷津があるが、現在、開発計画が出ており、なくなってしまうのではないかとされている。このため地元では調査をしてもしょうがないだろうという意見と、なくなるからこそ調査が必要という意見がある。これについて市民会議でどうするかを相談したい。

また前回調査しなかった「三ツ掘里山自然園」と「こうのとりの里」は、前回は開発されないだろうということで取り上げなかったが、この2か所の取扱いについてどうするか皆さんに検討していただきたい。

自然保護団体の会員から、新しい調査地点として、関宿橋付近の植物について調査すると良いのではないかという意見があった。

《会員》

どういう組織でどこを調査するかというのは、スタッフの自然観が反映されると思う。

プログラムの内容によっては、地元企業の方々も参加できるようになり、交流が生まれるかもしれない。

今回は決定しないが、どのような方が調査に参加してくれそうか、委員の方々の調査地点に対する考え方について、御意見を続けていただければと思う。

《委員》

過去に行った調査は、市内に箇所を設けて行う、言わば点の調査だった。動物は移動するからこれでも良いかもしれないが、植物はそうではないので全市内を調べないと意味がない。調査地点だが、利根川の川向こうに柳耕地という水田地帯がある。個人的に調べたところ、比較的珍しいものが6～7種類ある。これが抜けている。こういうところも加えた方が良いのではないか。

調査方法としては、植物の場合は個人で調べるのは限界がある。できれば有志の方を公募して複数の目で見るとどうか。

《会長》

調査委員の公募が挙げられたが御意見等はあるか。

《委員》

前回の調査地点は水辺の付近が多い印象を受ける。調査地点については、地元の人情報を元に場所の選定を行うべきではないか。地域の農家や自治体組織、その地域の老人クラブなどに調査を依頼してはどうか。地元の人ならどこに何があるかわかっているし、過去との比較もできる。素人の中に専門家が入ってもらえれば効果的に調査ができると考える。

また、1つのシーズンに複数回調査を実施することも必要ではないか。

私の地元では湧水地が多く、ホタルの放虫やタナゴ釣りを行ったりしている。こういう場所も重要ではないか。

《委員》

以前、市民レポーター制度で全市調査を実施したことがある。生物に対する知識が市民だけでは上がっていかない。行うなら専門家が加わって調査のたびに勉強していくシステムを作るべきだと思う。

調査地の件だが、野田には豊かな谷津がたくさんある。これを改良することで、もっと生きものが帰ってくると思う。前回のリストアップした調査地点は、水辺が多くなっているという指摘はその通りかと思う。

一方で、先ほど話に上がった、ホタルの放虫をやっているような場所は、極端に言えば調査対象から外した方が良くと思う。生きものを移入する場所は極力避けた方が良い。

調査地を変えずに観察していくことは、移り変わりを知るために重要であり、余り変更しない方が良い。新たな場所を加えていくという方向にした方が良い。開発が入って、もう調査す

る意味がないという場所以外は、変更しない方が良いと思う。

《委員》

この会議の目的は調査をした上で、市として、市民として、動植物を含めて共存していける社会をつくりましょう、あるいは商業・観光に結び付けていきたいと思いますということだと思います。その過程で、生きものがどこにどのくらいいるのかを調べる。逆に生きものが減っているところは放置するのではなく、移入することも必要だと思います。

《会長》

皆さま使命感をもって参加されているので、意見が衝突することもあると思うが、言うべきことは言っていたらと思います。

他市での経験からだが、調査の勉強会をした上で、このような主旨の説明をしたことがある。「地域の自然資源を将来にわたって健全に保全し子孫に伝えていく。そのために自然環境の現状を的確に把握し、保全すべき環境を明らかにし、保全のために具体的な計画を立案し実行する」。そのために皆さんと調整したいとお伝えした。

また、地域の自然環境ということについて「私たちの生命活動を支える自然環境で、大気、農業、水、食料であり、人も含めた生命の存在そのものとの総合的な作用、総合的な関係。その中には、経済的に価値を持つ自然環境で鑑賞に値する風景や、自然との触れ合いを楽しめる場所。」というのを含めた。

これまでの時間の話としては、「どこを調査するかということの切り口の話」と「その調査に関わっていただく人たち」について具体的な提案を頂いた。それを今、これはあり、これはなしと切り分けることはしない。

今、頂いた意見の中で、地元の自治体組織をうまく活用してほしいというのは実感している。地元のネットワークについて提案していただける方がいるのはとても大事だと思う。

他市で、ほ場整備の計画があった際には、地元の細かい部分まで把握できなかったため、地域の組合の方と一緒に歩いて調査をした。地元の組織、自然の専門家、地域に住み続けたいという住人を巻き込んでいくというのは大事な方向だと思う。

《委員》

調査地点の選び方としては、森、川、草地などの自然の種別ごとに候補地を挙げてから、下見をして調査地を決めてはどうか。

野田市は生物の基礎調査ができていないのか？できていないのなら、基礎調査も兼ねないといけないのではないか。

《委員》

調査地点の情報として「調査地の中心の緯度経度」「東西南北の距離」を加えてほしい。これらがあれば昔の地図と突き合わせて調査ができる。

できれば調査地の小字を把握してほしい。小字ごとに生活習慣などがある。資料 P3、③調査方法の表にも歴史・文化・食・暮らしと明示されている。小字は文献調査の際に役立つ。

《委員》

調査地の情報を詳細に記載することは賛成。

千葉県の博物館では独自のメッシュマップを作っている。これを活用しても良いのでは。

《委員》

民有地であっても調査すべき場所はあると思う。

《委員》

リーダーがグループの日程調整をする必要がある。特に野鳥は午前中、早朝からやる必要があるため、調整が難しい。場所を増やすとすると、労力の確保が難しい。市民モニター制度を活用する場合、参加者の知識を深めるため。リーダーを集めて勉強会をする必要がある。7月から実施していくとして、日程が確保できるか。

《委員》

議論を聞いていて、既存の15か所以外の調査候補地をリスト化し、すべて調査できるのか、優先順位をつけて絞り込まないといけないのかを判断した方が良いと思う。

調査員については、私たちの中にも定年後のOB会があり、いろいろな方がいる。このような方を活用していければ良いと思う。

《事務局：中村課長》

これまでの意見としては、15か所は継続性が必要であり、新しい地点も入れていく必要があるということ。また、今までの調査員のノウハウも新しい方のノウハウも必要であり、一度に

やるのは、この期間では難しいということ。

よって、この 15 か所の基準を元に新しい地点はどこがいいか、次回の会議の前に皆さまから御提案していただきたいと思う。

また調査員についても、新しく東京理科大学の学生や地元の方に加わっていただく場合には勉強会も必要となる。この 2 年間で勉強会をやりながら答えを出すのは非常に難しい。調査の骨組みを今回は作ってもらい、調査をフォローアップしていかなければならないと思う。

全ての調査を完璧にやるというわけではなく、基本的な調査をやりながら新しい骨組みを作り、調査を継続していくという考え方も良いのではないか。

次回の会議は、委員の方々から御意見を頂いた 15 か所 + α の調査地点の現地確認を終えた上で、会議を行えたら良いと思う。

《委員》

資料 P3、③調査方法の表内、調査方法(例)に目視とあるが、目視だけでは再現性がない。調査者が変わったら、再現性を担保できない。例えば鳥ならコースを決め、いつの季節に何時からやり、歩く速度はこのくらいと決めて行う必要があるように思う。植物の場合は標本をとる必要もあると思う。

《委員》

タナゴ池は野田で一番湧水量がある。珍しい植物もある。川間小学校の東側の田んぼは野鳥が多い。ここも候補地に挙げる。五駄沼も私が協力できる場所である。

《事務局：宇田川次長》

豊富な意見を頂いたが全ては処理しきれないため、情報を集めて表を作り、新しく調査する地点を検討したい。

《会長》

今すぐにはできないとしても、何をやるかという志が高ければ高いほど、多くの方に参加していただけたらと思う。開発計画があるから調査をしなくても良いではなく、何とか開発を思いとどまっていただく努力をする。その気持ちはなくさないようにしていただきたいと思う。調査を通じて、参加した市民の方から、是非ともここは残したいという意見を出してもらい、今後の野田市の施策に反映されればと思う。

いろいろな自然の捉え方があると思う。古城の石垣のところに希少種が生えていたり、貝塚を保存するために草刈りをすると、そこに日陰になると絶えてしまうような草花が生き残っていたりする。歴史的な文化財を守ることと、希少な生きものを残すことは相性がいい場合がある。

また人工的な環境の寄与という点では利根運河の堤防管理のために草刈りをすることが、良い側面をもたらすということがある。電力会社の変電所など、立入禁止になっている場所に在来植物が生えていることもある。意図しないところで自然が残っている例は多い。自然、人工的な場所を問わず、多面的な視点から地域の自然の豊かさを見ていくという切り口で、各地域がどういう特徴をもっているかを見ていくのも大事だと思う。

以前、市民団体の皆さんと活動した際に、5人に1人が知ってくるとかなり認知度は大きいと言われた。地主の方や地元の方にちゃんと調査をさせてくださいと話をし、5人に1の方に認知してもらおうようになれると良いと思う。

調査地についても、この3年間では15に絞ったが、もっと良いところがあるので引き続き調査をさせてほしいと積極的に言って良いと思います。

《委員》

植物の場合は全体調査をしなければ実態はわからない。生物多様性の戦略に希少種が載っているが、調査地点の15か所に入っているわけではない。これら15か所以外に、全国的に見ても希少な種が確認されている場所がある。全市内的に調査しなければ意味がないのではないかな。

《会長》

限られた時間と人的資源の中でできることをしつつ、この枠でできないのであれば私たちの活動の中でやっという提案もできる。御提案していただいたような綿密な調査を今回の計画に含めるか、次の段階で博物館の人たちにも予算をつけてやってもらうのか、うまく整理していく必要があると思う。やるべきことはきちんと議事録に残し、限られた時間の中で整理していく。そこは行政の方に手腕を発揮していただく事になると思う。

《委員》

15か所以外にも希少種があるところをリストとして挙げてもらいたい。

野田の昆虫談話会は、現在も活発に活動しているか。そうであれば昆虫調査を野田昆虫談話

会に依頼してはどうか。

《事務局：宇田川次長》

野田昆虫談話会は元気に活動している。断続的に調査をしている団体なので、調査をお願いしたいと思う。

《委員》

全体調査は良いと思うが、かなり労力がかかる。そういうことは土屋さんや専門の方々に別途、抽出というか調査をしていただくのが良いのではないか。

調査は、できれば前回調査した方をお願いするのが良いと思う。同じ人なら5年前との変化を挙げられる。

《会長》

調査方法や調査場所、調査者に御提案していただいたので、これを整理した上で次の会議までに御提出していただきたいと思う。

一番大事などどうやるかについては、何をやるべきなのか、どこをやるべきなのかを踏まえた上で、時間の中でどう収めていくかだと思う。

(3) 社会環境調査の計画（案）について（資料3）

《事務局：茂木係長》

資料説明

《会長》

生物多様性戦略の目指すところを市民に周知し、ふだんの生活の中で実践していただけるような方策として、アンケート調査を実施するための御意見をお願いしたい。

《委員》

自然や生きものがなくなった場合、どのようなことが起こるかを考えられるような質問を入れると良いのではないか。

《委員》

生きものの豊かさアンケートの別添資料は、小学校5年生全員に配布しているか。生物多様性に関する啓発活動は、どのようにやっているか。

《事務局：宇田川次長》

前回実施した際には、アンケートを市内の小中学校全校に配布している。生物多様性についての理解を深めていただく意図で、インタビュー形式をとり親子で会話を行ってもらった。前回の回収率が高かったため、今回も同じ形式をとっている。

その他の啓発、同じようなアンケート調査としては、前回についてはその他の場所では実施していない。

《委員》

野田市は生物多様性に重きを置いて活動していると聞いているが、野田市内の小中学校では、どのように行っているのか。

《委員》

中学校と小学校では条件が違うが、福田中学校では年4回フィールドワークを体験し、レポートを書くなど啓発体験をしている。子どもたちは大変喜んでいるが、小学校からの積み重ねがあると思う。他の中学校では、理科の授業の中で自然体験はありますが体系立てては学んでいなかった

《委員》

先日、福田中学校の先生から「生徒の理科への関心度が全然違う」と聞いた。また、生徒に話を聞いたところ「楽しい」という言葉や「3年生になっても持続して勉強していきたい」という声があった。市民向けの観察会では、「学校でもこういうことをやってほしい」という声があった。一方で、周囲に適切な自然環境のない学校もあり、そのような学校はかわいそうに思う。

《委員》

生物多様性について、市内にどれだけ浸透しているかという点、ほとんど知られていないと感じる。このようなアンケート調査はとても大事だと思う。最近、外来種が問題を起こしている。市としても対応してほしい。

《委員》

福田地区は自然に恵まれており、自然に対する考え方は深いと思う。アンケートを行う際には、できるだけ早めに校長への連絡をお願いしたい。学校での準備ができる。アンケートはマークシート形式でも良いように思う。

《委員》

先生方からの社会環境調査についての御意見は、多様性という言葉を使うかどうかは置いておいて、その趣旨に沿った形でどういったプログラムが実施されるのか、また、それを体系化していく必要があるのではないかという主旨と受け止めた。

江川地区はこれまでの取組の成果として、自然と親しむシンボルとしてコウノトリがあり、その学区の皆さんが自然とともに学ぶ、子どもたちの喜ぶ顔を見られる。その良さを学校の先生方が実感できる場所だと思う。

この会議では、この状態が野田市に全体に広がり、それぞれの地域で自慢となる地域をつくっていくための基礎調査になると位置づけていただけると良いと思う。

このアンケートづくりをきっかけに、生きものを大事にしていくことをベースとした子どもたちの体験の場を市内に浸透させていく。そのために既存のものを把握して、学校教育などの中に組み込んでいただけると良いと思う。

最後に発言の少なかった委員の方から、一言頂いて閉会としたいと思う。

《委員》

アンケートで残したい場所を聞き、そこを次の機会に調査地点に加えていければ良いと思う。

《委員》

里山の維持には農業後継者が大事。いかにして後継者をつくるかを中心に貢献したい。

《委員》

調査に中・高生の活用を考えてはどうか。市の自然再生のシンボルであるコウノトリへの関心が薄れている気がする。話題提供の後押しをもっとしても良いのでは。

《副会長》

今の小中学生の保護者は自然体験が少ないと思う。アンケートを通して、保護者が自然に関心を持つのは良いことだと思う。

私は小学生の頃に開墾をした経験があり、これは貴重だった。こういう経験があれば一年間の季節の移り変わりにも関心を持つ。このような体験をできる場所がこれからも大事だと思う。

《委員》

生物多様性について遠慮のない意見を交わせた貴重な場。これを機に、つながりを広げていくことが大事だと思う。大学生などの若い力も活用していく方法を考えていただければと思う。

《事務局：中村課長》

次回の会議は来年度に入っすぐを考えている。

調査候補地については3月15日くらいまでに事務局に御意見を頂きたい。これをまとめて夏からの調査に間に合うように組んでいきたい。

社会調査の方にも御意見を頂いたので、そういったものも入れさせていただき、もし御意見があればそれも含めて内容を見直したいと思う。また、教育委員会とも至急調整して、校長会でお願いしたいと考えている。

次回会議日程は、資料を取りまとめ次第、皆さまに御連絡したい。

《事務局：今村副市長》

前は戦略を作ったところで終わってしまった。本来なら毎年進捗を確認していくところだったが、初年度からできなかった。今回の市民会議は常設なので、戦略を作った後も進捗の状況を皆さまに確認していただきたいと思う。

先ほど、会長から全部が調査の中でできるかどうかという話があったが、戦略の中にこれからやっていかなければならないような調査などもしっかり書き込んでいただき、それを着実に次の段の戦略でやっていくということも考えている。

令和3年度末までに必ず作成する必要はなく、多少、延びても良いと思っている。例えば夏から調査が始められなかった場合は、秋からスタートし令和4年度に入っても仕方がないかと思っている。良い調査をしていただくのが一番だと思う。また、戦略に書かれた調査が全部で

きると思っていないが、次の4年度以降に着実に実施していきたいと考えている。

《会長》

以上をもって、令和元年度第2回野田市生物多様性のだ戦略市民会議を閉会とする。